

同志社大学国文学会彙報

程

猪野 謙二氏

昭和四十九年度国文学会活動状況

明治五年の油取り―農民一揆と民話との関係から―

佐竹 昭広氏

△国語教育研究会（六月九日・勤労会館）▽

古典教材―万葉集を中心に―

昭和四十八年度卒業論文題目

明川 忠夫氏（同志社香里高校）

△日本文学古代前期▽

「最後の一句」の授業

額田王研究

福田 恒子

新保 幸子氏（高槻市立柳川中学校）

東歌研究

金澤 照美

人麻呂挽歌―その特色―について

木下 孝子

△教育問題懇談会（八月一日・平安女学院）▽

生徒の生活指導について

山上憶良について

杉山 芳見

内田 満氏（平安女学院高校）

万葉集防人歌

津田 充代

大伴旅人

山田 徹

△総会・研究発表会（十一月二十三日・教育文化センター）▽

工業高校の現状と国語教育

詩人―人麻呂と神話

片山 敏廣

瀬田 清子氏（大阪府立佐野工業高校）

額田王論

山本 洋子

万葉二題

岡島 秀仁氏（大学院生）

△日本文学古代後期▽

枕草子にあらわれた美意識について

浅野 千寿

△国文学会講演会（十二月十四日・教育文化センター）▽

漱石文学の成立をめぐる―「吾輩は猫である」までの道

枕草子の「をかし」について

原田 照子

帯木卷冒頭試論

—紫式部と伝統—

和泉式部日記における和泉式部像

清少納言論

光源氏物語の駆動軸

—「なからひ」から「死」への傾斜—

大君論

伊勢物語

—昔男が語るもの—

紫式部の「身」と「心」をめぐる

紫式部集に秘められた魂

竹取物語の文芸性

紫式部にとっての宣孝

「伊勢物語」作者の意図とその限界

伊勢物語試論

和泉式部日記

女三宮の降嫁をめぐる

源氏物語にとって美とは何か

—死生・生・死—

「かげろふ日記」私見

「かたりごと」の伝統

△日本文学中世▽

清盛の文学的人間像

暗部に巣くう女性 遊女・白拍子

—祇王を起点として—

藤原定家

—有心論と定家像—

平家物語灌頂卷考

—灌頂卷における「死」と「涙」—

平家物語と末代意識

—主に重衡像を中心として—

世阿弥の能と幽玄についての研究

世阿弥能楽論とその幽玄

平家物語における中世文学精神

平家物語における女性について

「砧」論

太平記成立に関して

—三部構成説をめぐる—

平家物語と夢説話

塩見 厚生

安藤美知枝

馬場美紀枝

橋本 正俊

本田 邦子

岩本 京子

金剛 永謹

三上 由紀

南 幸代

宮沢 真弓

中村 淑子

新添 政美

小関 真理子

本田 正行
生 沢 秀子
神 村 紀子

久保田 孝夫
桑 原 和子

皆川 しほ江

森 田 雅代

数 藤 昌子

田 中 洋子

田 中 容子

常 陰 いく子

梅 木 明美

宇 都 木 明子

渡 辺 加代子

渡 辺 早 苗

中 林 修 子

狂言序説

— 文学史への試み —

閑吟集の享受層

平家物語における清盛像

狂言の諷刺性

— 天正狂言本から虎寛本に至る過程

新古今時代歌人と本歌取

「平家物語」における清盛像

佐野 葉子

芝田 義勝

鈴木久美子

竹田 有希

山野 博典

谷口 典男

△日本文学近代・現代▽

立原道造研究

「こころ」私観

「汜濫」論

「仮面の告白」論

啄木論

— 「芸術と実生活」の問題 —

草野心平の詩的世界 — その蛙の世界

「こころ」論

— 「明治の精神」への殉死の意味 —

夏目漱石「明暗」私論

漱石の文章

「其面影」論

— 二十年後の内海文三 —

「行人」論

春琴抄論

人沢康夫、その世界

「梶井基次郎」

試論 三島由起夫 — 死への軌跡

石川達三論

後藤 和子

平尾 徹美

古内 恵子

池田 貞夫

石野 好晴

川原崎一 夫

紀 仲 圭子

北 川 秋 雄

駒 山 徳 男

児 島 伸 治

松 岡 万 里 子

宮 武 政 博

村 橋 義 隆

中 川 英 二

中 村 貴 志

中 沢 正 春

△日本文学近世▽

「曾根崎心中」

「好色五人女」

「助六」私論

— 反抗と状況 —

「好色五人女」

「出世景清」論

「世継曾我」考

物語作家としての上田秋成

「世間胸算用」考

「曾根崎心中」

川崎 さゆり

木村 素子

大橋 一生

阪本 隆司

浅妻 絵

中村 嘉代子

中嶋 あつ子

児島 伸治

松岡 万里子

宮武 政博

村橋 義隆

中川 英二

中村 貴志

中沢 正春

—「私ひとりの私」への過程—

夢十夜試論

大江健三郎論

井上光晴論

織田作之助論

谷崎文学に於ける女性美

「片腕」論

「河童」小論

—死への道程—

宮澤賢治私論

—修羅の道程—

堀辰雄「菜穂子」

シュルレアリスム詩論（滝口修造論）

太宰治 その生活と美意識

宮澤賢治論

林芙美子「浮雲」論

三島由起夫—その死の場合

小林秀雄論

透谷の文学経路と楚囚之詩について

中島千恵子

西村陽子

西崎文博

岡田光展

沖津博人

小野やえ

佐々木優子

嶋津真智

高橋寿美子

富田裕次

上田雅巳

山田一幸

村上美和子

森岡繁巳

木村和也

平松敏明

△国語学▽

「緑」考

長井晶子

昭和四十八年度修士論文題目

「寝覚物語論—生霊事件をめぐる—」

音田能子

平家物語の思想

吉川敏郎

有島武郎論

内田満

語の文法的構成—暁語を手がかりに—

蜂矢真郷

会員の新书推荐

（本号より、会員の新书推荐欄を設けました。著書・論文（雑誌論文を除く、講座・論集など）を發表された方は、内容を学会宛お知らせ下さい。）

○広川勝美編『物語と説話』（B6判、二四六頁、一九七四年七月、

汐文社 千四百円）

I. カタリと物語／1. 反神話と非神話／2. 神話の変貌／3.

色好みの変容 II. 歴史意識と仏教／1. 罪惡の発見／2. 厭離

穢土・欣求浄土／3. 惡の論理の否定／4. 王法と仏法 III. 他

界と制外／1. 他界からの訪れ／2. 他界への回帰／3. 漂泊者

の代受苦／4. 制外者への下降 IV. ハナシと唱導／1. 愛執と

恩愛／2. 仏神の幻影／3. 奇異と俗惡 V 説話と説話文学

執筆者は広川勝美・駒木敏・菅野美恵子・生形貴重・吉川敏郎・

広田収・生井武世・今井昌子・黒沢幸三の各氏

○有倉遼吉・土橋寛共編『私立大学の危機―教育・研究と財政―』
(B6判、二四六頁、一九七四年十一月、時事通信社、九〇〇円)

私立大学の交遷(尾形憲)／私立大学と学術行政(土橋寛)／私立
大学と国民の教育権(兼子仁)／私立大学における教育と研究(川
口弘)／私立大学と大学院(並木美喜雄)／「国立私学」を提言す
る(岩尾裕純)／資料(日本学術会議がおこなった私立大学関係の
勧告・要望・申入れ、私学関係振興予算一覧表)

○山田昭夫・内田 満 共編『近代文学資料8・10・有島武郎』上
・中・下(三分冊)一九七五年一月、中下巻順次刊行予定、桜楓
社、各一、〇〇〇円)

上巻：第一部 有島武郎全集逸文／遺稿(二編)／逸文エッセイ
(六一編)

中巻：第二部 有島武郎全集未収録書簡／未発表および未収録書簡
(二〇一通)／書簡(総)目録／書簡人名索引ほか／第三部
近親者資料／父武による「有島武手記集」ほか、母・妻・弟
・子息によるもの七編

下巻：第四部 周辺資料／「稲穂崎の素人画家」／農場関係資料な
ど四編／第五部 年譜／研究文献目録

同志社大学国文学会会則改訂全文

改訂 一九七四年十一月二十三日

第一章 総 則

第一条 本会は同志社大学国文学会と称する。

第二条 本会は国文学・国語および国語教育の研究を目的とする。

第三条 本会の会員は同志社大学国文学専攻に属する左記のものとする。

1 専任教員

2 学部在學生

3 大学院在學生

4 学部卒業生

5 大学院修了生

ただし、特に入会を希望し、評議員会の認められたものは会員になることができる。

第四条 第三条4・5項目の会員で、卒業または修了後四年以上を経過した者、および第三条ただし書きによる会員は、退会することができ。また、これらの会員のうち、会費の滞納が二年分以上に及んだ者は、退会の意思を表明したものとみなす。

退会者が復会を希望する場合は、未納会費を納入するものとする。